

国際公会計学会第 25 回全国大会の開催報告

2022 年 8 月 20 (土)・21 日 (日)、長崎大学経済学部を主催校として、国際公会計学会第 25 回全国大会を開催しました。

当初、準備委員会は「出島メッセ長崎」において、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催することを準備しておりました。しかし、新型コロナウイルス感染症が急拡大し、長崎医師会が単独で緊急警報を出す事態となったため、誠に残念ながら、理事会のご承認を得て、オンライン開催へと移行させていただきました。

今大会の統一論題のテーマは、「長崎開港 450 年の歴史を踏まえた公会計—過去と現在、今後の展望—」でした。その目的は、長崎の歴史的背景を踏まえた上で、現在と今後の課題を通じて、公会計の活用についての討論していただく機会とすることにあります。

これを受けて、大会の初日では、田上富久長崎市長から「長崎の町づくり—100 年にいちどの長崎—」と題して長崎の将来像について記念講演をしていただきました。その後、統一論題報告では、山本清国際公会計学会長を座長にお迎えし、長崎市シーボルト記念館徳永宏館長が「明治初期における長崎県の財政」、長崎大学経済学部南森茂太准教授が「明治初期の地方公会計と長崎」、長崎県総務部財政課小林純課長が「長崎県の財政について」というタイトルで報告がされました。

大会 2 日目は、午前中は 2 会場に分かれて、6 つの興味深い自由論題の報告がなされました。午後は、統一論題討論が行われました。

二日間を通じて、全国の大学・研究機関、行政、公認会計士、税理士等多くの方がご参加いただき、活発な議論と質疑応答が展開されました。

かつて長崎は、出島を通じて海外の文化を取り入れ、それを日本中に発信をする「知」の拠点でした。日本のグローバル化とローカリゼーションの拠点としての役割を果たしていたこの長崎で、田上市長による長崎の将来像実現のための財源について、統一論題では 3 名の報告者により、長崎の財政の歴史と現在についてご報告と討論がなされたことは、今大会のテーマに即した内容になったと思います。450 年の歴史を持つ長崎で再び「知」の共有がなされたのであれば、主催者としてこの上ない喜びです。

今大会の開催にあたり、経済学部同窓会「瓊林会」からご協賛をいただいたほか、長崎県、長崎市、長崎大学、長崎県立大学の後援を受けることができました。この場を借りて御礼を申し上げます。また、今大会の運営面で至らないところもあつたことについて、お詫び申し上げます。末筆とはなりましたが、皆様のご協力とご支援により今大会を無事終了させることができたことにつきまして、準備委員会一同より御礼を申し上げます。皆様の今後のご健勝とご発展をお祈りして、国際公会計学会第 25 回の開催のご報告とさせていただきます。

国際公会計学会第 25 回全国大会準備委員会一同

2022 年 8 月 23 日